
ポートのふたり

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボートのふたり

【EZコード】

N58920

【作者名】

大森ろい

【あらすじ】

ボートに乗つてふたりの時間を楽しんでいるカップルに訪れた不穏な気配とは・・・・

日常に潜む闇を描いた物語。

風がすこし冷たいせいか、池に出ているボートの数はそれほど多くなかつた。

古びた桟橋からそつとボートに乗り移つた瞬間、ゆらゆらとボートが揺れ、亜衣はバランスをとるよつて両手を広げた。

「だめだ」

怒鳴るような声におどろいてふりかえると、ボート屋の男が子供の頭を叩くように手を下にふつてこるのがみえた。

「あぶないからなやく座つて」

彼女が腰をおろしてもしばらぐ、ボートは不安定に揺れていった。男は桟橋に立つてふたりのボートがゆっくりと離れていくのを見ていたがやがて肩をすぼめるようにして小屋にもどつていった。

彼女の向かい側に座つている広樹はまわりをみまわしながらオールを漕いでいる。ほかのボートに乗つているのも彼らとおなじよつなカツプルたちだが、むにじうの池の端のほうでとまつてているボートだけは、若い男がふたりで乗つていていた。

「そうだ、写真どうう」

広樹はオールから手をはなすと、鞄からデジタルカメラをとりだして亜衣にむけた。彼女は笑顔をつくり、すこしポーズをつけたりして何枚か撮らせた。それから交替して彼のこともやはり数枚撮つた。寒いのか彼の顔はすこし白っぽかった。

「あんなにたくさんの方の子をいつぺんにみたの、はじめてだよ」

「うん」

「まあ、亜衣がそのなかでも一番よく似合つたけど。今日一日だけなんてもつたといないよね。ほんとに」

「でもこれたいへんなんだよ、着るの。朝早くから美容院にいつて、髪をセットして、着付けしてもらひて

「でもいいよ、それ

「わかるけど」亜衣はほほえむ。「でもたぶんもう一生着ることは

ないね、これ

「そうだよなあ

広樹の残念そうな顔に亜衣はほほえんだ。

雲に隠れていた太陽がでてきて水面をきらきらと輝かせた。ボートが一艘、ゆっくりとこちらにやってくるのが彼女の視界にはいった。男がふたりで乗っている。どちらも帽子をかぶっていて、ひとりは白いニット帽、もうひとりは赤い野球帽だ。体は大きいけれどまだ十代のようにみえた。ふたりはこちらを見ているようだった。

「あっちのほうに行つてみない？」彼女はきれいな羽のカモたちが泳いでいるほうを指差した。

「オッケー

彼女は揺れを感じながら桟橋のほうをふりかえった。ひとの姿はなく、ボートが枝豆の鞘のようにしづかに並んでいる。

「風がやんだね

広樹は帽子を脱ぐためにオールから手を離した。額にすこし汗をかいている。彼は髪をなでつけながら、目の前に座っている彼女の姿をじっとみつめた。サクラの形の髪飾り、若草色の半襟、薄桃色の地に白、赤、金の桜が散った着物、緑色のぼかし袴。

亜衣は首をひねるようにして、少年たちのボートがこちらに近づいてくるのを見ていた。

「ねえ、もう戻らない」亜衣は言った。「どつかであつたかいものでも飲もうよ

広樹も亜衣の視線の先に気づいた。ちょっとおどろいたような、困惑したような表情が浮かぶ。

「だね」と彼は言った。「さてさて、戻りますか。すこし揺れますからご注意ください

少年たちはどんどん近づいてきていた。ふたりのほうを見てにやにや笑っている。広樹は力をいれてオールを漕ぎはじめた。オール

がばしゃばしゃと水の表面を打つた。彼らのボートは無駄に揺れるばかりで進みが遅いが、少年たちのボートは嘘のよじこすうつと水を切り裂いて近づいてくる。

口元をかたくした広樹は桟橋へむかって真っ直ぐ漕いでいたが、ふりかえると少年たちのボートがそれをふさぐようにはいつてくるのがみえた。

「なんだよ」

「ねえ、おちついて」

亜衣が不安そうに膝をそろえて彼のことを見つめる。

「ふざけてるだけよ」

他のホーリーにて起立していなことは決してないよ。た

おーい、と漕いでいないほうの少年がふたりにむかって手をふつた。なにか叫んでいる。何度目かで亜衣は少年が「おめでとう」といつているのに気づいた。

「おめでとーおめでとー」
この袴のせいなんだ、と亜衣ははつとした。この袴姿が彼らの関心をひいたんだ。

広樹は黙つて棧橋のほうをみてゐる。ボート小屋にはひとがいるのだろうが姿がみえない。

おーい、無視すんなよ、と少年が叫んでいる。

広樹はボートの方向を変えた。急がずに、ゆっくりと漕いでいく。少年たちはふたりのボートにむかって着実に近づいてくる。広樹はそれを避けるように漕いでいく。はたからみたら、友達同士でふざけあつてゐるようだみえたかもしねない。

氣づくとふたりは桜の枝がたれさがつてある池の端まで追いやり
れていた。枝の先にはつぼみがたくさんついていて、いくつかはも
うひらいている。もつすこししたらきれいに散つて水面を白い花び
らが覆うのだろう。

ふたりは揺れのせよまつたボート上でみつめあつた。なにかいや

な田にあうのかな、と亜衣はおもつた。遠くをみると、ほかのボートに乗つてゐるひどい人がこちらをみつめている。彼らはふたりがちょっと困つたことになつてゐるのに気づいているようだつた。亜衣にはそれがわかつた。彼らが直接ここにやつてきて自分たちを助けてくれる気がないことも。

たぶん少年たちはとてもひどいこと、たとえば水を引っ掛けたり、オールで小突いたり、ボートを倒してわたしたちを水のなかに落としたり、といったことはしないのだろう、と彼女はおもつた。彼らはただわたしたちがちょっと困るところをみたいだけなのだ。わたしたちはだからただちょっと困つた顔をして、不安でたまらないといつた調子でもうやめてくださいと彼らにお願いすればいいのだ。君は喋らなくていいから、と広樹は言つた。

彼女は袂に触れたまま、またボート小屋のほうをふりかえつた。人影がみえる。でも外に出てくる気配はない。ほかのボートは相変わらず静止している。せめてどれか一艘、桟橋にもどつてあの人の影にひとつこと、このことを知らせてくればいいんだけど、と彼女はおもつた。

オールが乱暴に水を叩く音がする。波が押し寄せてふたりのボートが力なくゆれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5892o/>

ボートのふたり

2010年10月30日08時55分発行